

最幸福な男だらうと思ひました。

さう思ふだけ、彼の男を翻弄した周囲の力の如何に激しかつたかを感せずには居られません。私だつてあなた位の年輩には少しは書物も讀んだ。順道に行けば今はこんな事をしてゐる筈ぢやなかつたのです。私ばかりぢやない。大概の人はみな本性の趣く所を沮まれて、欲しない境に生きる。人は自らの力で位置を作るのぢやない、動かすものはたゞ周囲の力です。才能、智識などの相違も決して特むに足らない、極めて微な力です。境遇の前に立つては賢も愚も同じ様に押流されて了ふ。

いや、話が理窟になりましたが、あの男などは盲目で押流されるだけ、幸福と云へは幸福でせう。

吉良川の町へ着くと男は邪見に女房を叩き起して行季を擔がせ、自分は看板などの搦んだものを肩に載せて、私に鳥渡頭をさげてどこへ行つてしまひました。

それから丁度一年になります。まだあの女房とも別れず、子供まで出来た様を見ると、また種々な感慨が催されます。

微風はすでに話半に海の方から吹いて、酔は全くさめてしまつた。商人は沈んだ色の白い面を斜にして、靜に暗い沖の方を眺めてゐる。

くすり湯

水野 仙子

筆を嚙んだ唇を眞つ黒にして、土曜なのでお晝も喰へず、蜻蛉つりに飛び出した章が、水貰ひに寄つたのを、いゝ幸ひに捉へて、山のおばあさんにお使ひを頼んだ。



「いゝかい、忘れてなんねえぞい、薬湯がたつたから、おなかおばあさんに遊びにおいなんしよつて

ない、よつくさういふんだぞ」

と繰りかへし、そのお茶盆の上の煮豆を、立つたまゝで一匙すくつて、ねつから上の空で諸々云つて居る章にふくませて、今日は催促されないうちから、火鉢の引き出しを抜いて、膏藥やら脚のはだかつた簀やらを掻き廻して居たが、やう／＼二錢銅貨を見付けて駄賃にくれた。

投げ出して置いて麥藁帽を搔つ手繰つて、ひたりと庭に飛び下りて、框に手をついて草履をはいて居る顔を、

「おや／＼」と仰山に驚いて、

「待つて、待つて、まあ其顔はなんつう顔なんだい、それ／＼、あ、凍が口にはいる！」

とおばあさんはさもきたなさに顔を顰めて見せて、ごそ／＼袂を探つて居る。章はづすりと一の駝り込んで、それでも待ち心に、まじ／＼おばあさんの手許を見て居たが、袖の中でいつまでも手がもくもくして居るので、堪らなく焦躁たくなつた。

「いゝ！」叫ぶや否や、ひくりと閨を飛んで馳け出した。

「あれ！ 章、章」

おばあさんは周章で、起つて来て呼んだがもう見向きもしない。

「ほんに性急な子だ」と、其子がよく似た伴の性格を一寸思つて、折角熨した紙をまた丸めて、袖口から袂に落した。そして綺麗に拭き届いた板の間に、小さな足跡がぼつ／＼浮いて居るのを、がちや／＼した家の、せゝこましい勝手で、わい／＼騒ぎながら飯臺を圍んで、茶碗を抱へたり箸で井を叩いたり

ら袂に落した。そして綺麗に拭き届いた板の間に、小さな足跡がぼつ／＼浮いて居るのを、がちや／＼した家の、せゝこましい勝手で、わい／＼騒ぎながら飯臺を圍んで、茶碗を抱へたり箸で井を叩いたり

いづれも丸い顔をした子供達の有様を思ひうかべて、念入りに雑巾を絞つてそれを拭きはじめた。
お晝を食べてから一時間ばかりは、鯉節をかいたりお茶盆を揃へたり、ひとりで體を動かして居たがやれ／＼と一風呂浴びて来て縁近くたるんだ肌を風に吹かせて居た。

「なんつう眞んに、こつちの家は何時來てもせい／＼として氣持ちのいゝことねえ」
おなかばあさんが腰をのして其處に立つた。

「さあ／＼」と散らかつてた帯を膝の上に掻き寄せて、山のおばあさんは愛想よく、

「さあづと……先刻からとても待つてやしたぞい、なんてまあめつきり暑くなりやしたことねえ、まごめなんしよ、えゝ今一浴び浴びて來たとこのい、薬湯も時々はいゝもんでねえ」

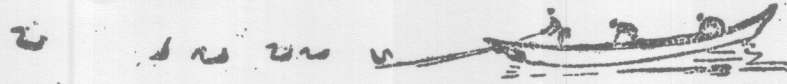
おなかばあさんはがさつく煎餅の風呂敷包を縁に置いて、倒れた枕を直すのもどかしさうにすり上つた。足を開いてへたんこに座つて、おゝ暑い／＼と襟を後にやる。山のおばあさんは、ふと其老人の紋切り形を可笑しく思つた。自分はまさかそんなでもあるまいと思ふ、儂い矜りである。

「どうです、おなかさん、直ぐに一風呂はいつて來ては、今私あがつたばかりで恰度いゝあんばいだつたから……ね、さうして汗流したところでお茶にしやすべわい。さあ／＼はいつておいなんしよ。手拭ひはその縁にかけて置いたつけから……」

「さうけえ、そんぢやら遠慮なしに頂くとしつか」

膝に手をついて起つて、おなかばあさんは湯殿へ行つた。

山の家持主の一家が時々やつて來て、一日遊んで行くことがあるので、湯殿なども一寸洒落れた造作になつて居る。山の家とは或る富豪の隱宅——遊び場所で、金の費つた庭は随分廣い。池もあれば築



山もあり、茶室も建つて居るし、二つ三つの凝つた石碑には、一寸近郷に名の知れた先代の發句が刻まれてある。水月園と名付けて、一言断れば縦覧は御隨意になつて居る。

山のおばあさんは其留守居である。子供達が山の家——と言ひつけたので、おばあさんもお春といふ名は滅多に使はれず、知つて居る人はみんな山のおばあさんといふ。

蟬の聲にふと氣がついた。おなかばあさんは、今年になつてから初めて聞いたのだと思つた。青々とした畑に圍まれた小高い家と、白壁と雑音に挟まれた町の家とから、ものごとに執着の強い魂が、手際よく放されて、初めて夏といふ感じを新しくした。稍々白く瑠璃色に濁つた湯が、高い香りを——老人は得てこんな匂ひが好きなものだ——湯氣に包んで、内から外から、纏つた考へを溶かして行く。

「みん——蟬が能くなく年あ豊年だつてねえ」

ふとこんなことを言はうとして、聲が居かないのを思つて止めた。欠伸が續いて出た。

臺所では先刻からコト——音がして居る。今度は組に庖丁をひく音の節が、新漬けの、鐵漿のやうな色をした茄子を思はせて、食欲を感じた腹が、言ひやうのない目先のある樂しみを齎らした。

ふと後の細い通りに足音がした。と思ふ間に憚りなくその木戸を開けて、鏝のせまい麥藁帽と、白緋の上半身とが、窓の竹格子をかすつて行く。直ぐ辰さんだと思つた。縁の方へ廻つて行く姿を逐つて居ると、妙な聲を出して呼んで、帽子をぬいて上へあがつた。脊の高い、肩の張つた立派な體格で、髪は長くべつたりと分けて居る。オリープの絞りの兵兒帯などを締めて、どう見ても立派な若者だ。ふと小野屋のお繁さんが「あれでなか——女好きなんですよ」と言つて笑つたことを思ひ出した。

おなかばあさんは赤くなつてあがつて來た。

おなかばあさんは赤くなつてあがつて来た。



「やれ／＼さつぱりとしたことう。来たない辰さん、どうしたい？」

続りの浴衣の胸をほだけてそこに坐ると、何やら不平さうに手で口をきかして居た辰さんが、急にこゝとしてぼくりと一つ頭を下げた。

「えゝこれもあ……」と山のおばあさんが引きとつたが、別段續ける言もなかつたので、

「ねつから構へもしないだし、どうでしたい湯の挨拶は、ぬるくありやせんかつたかい」

「えゝ／＼とつてもいゝあんばい、なあんついゝお湯だつたかゝあゝ／＼久し振りでのんびりとした。」

辰さんは氣を利かして團扇をもつて来てくれた。するとおばあさんは思ひ出したやうに手真似で巧く

お湯にはいつて行けといふ。辰さんは一寸躊躇て居たが、やがてつと手拭ひを受け取つて湯殿へ行つた。

「辰さんは今年幾歳になつたんですい、なんて宜い體だことね、眞んにいゝ若者になつた」

おなかばあさんは後を見送つて居る。

「なあにはあ、體ばかり大きくて仕様があらやせんわい、役にたゝすだから……さうだねえ、今年は六

か……いや七になつたんですべと、二十七に……」

「ふうむ、早いもんですない。何ですかい今でもあのやつぱり小野屋に……さうけえそれはようがすな

い、今ではなんでもはあ出来やすべいから」

「なあに根づから眞剣になんねで困るんでつさい、そんでも遊ばせて置くよりはと思つてね、あれで此

頃はまだ／＼生意氣になつて……」

山のおばあさんは飯臺を持ち出して来て、それに細かな皿を並べたてた。

「小野屋のお繁さんはまた子供が出来たんだつてねえ、よくこまかに産す人だわい眞んに、今度は年々

子だつべい……」

「えゝ、年子ですぞい、それでもあの人はいつも産が軽くて幸福い、産婆さまが間に合はない位なん
だものいつだつて……眞んにあんなに産の軽い人もないもんだ」

山のおばあさんは頻りに起つたり坐つたりして居たが、チリン／＼盃を觸れさせながら盃洗を持つて
來て、銅壺から徳利を抜いて袴を着せた。

「さあおなかさん」と坐り直して、

「ま、づつと此方へお寄りなんしよ、何はなくとも一盃……」

「おや貴女、お春さん何しんですい、構はないでおくんなんしよ」

「いゝえ、なあんにも無くて何だげつとね、まあ一盃あげやすべわい」

「大へんですまない、いつでも／＼御馳走になつて……」

これからが楽しみ、といふやうな顔して二人は向ひ合つた。女としては二人とも随分いける方である。
素麵の三杯だとか、胡瓜採みだとかいふやうなものを肴にして、酔の廻るのを惜しさうに、すぐ今言
つたとを忘れるやうな無駄話をしながら、ちびり／＼と二人は盃を交した。辰さんがあがつて來て暫く
それに交つた。辰さんはさも甘さうに手付よく盃を持つ。山のおばあさんは何處か氣まづさうに、それ
でも心よく注いでやつて居たが、いつまでもけろりとして居るので、歸れといふのであらう、手眞似でま
た話をはじめつた。やがておばあさんは口小言を言ひながら起ち上つて、箆筒の引き出しを開けたが、
一寸隠すやうに後向きになつて錢の音をさせて居る。口の小さいちよ／＼した辰さんの顔を見て居る
と、氣の毒なやうな、可笑しいやうな氣持になつて、おなかおばあさんは思ひ出したやうに膝を頼し

と、氣の清なやうな可笑しいやうな氣持をいふて、またかまをさへ見て、

て澁團扇を使つた。

辰さんが歸つたあと、山のおばあさんは俄に燥ぎ出した。よく笑ひよく饒舌る。今日もまた出るなと思つた通り、例によつて東京の自慢話が出た。上野の櫻の賑はひ、浅草の觀音様の大提灯仲見世の毎日の人通りは、此地の鎮守祭禮の時の、屋臺の前に群がる人出程ある、といふやうなことは、もう度々だから想像も働かないが、いかにしても、それが第一の自慢の、其贅澤な息子の生活が腑に落ちぬ。女中が幾人も居て、子供が皆乳母車に乗つて、奥さんは平常に縮緬の着物を着て居る。華族様ぢやあるまいと思ふ。さうしてはこれが其立派なほんとした座蒲團に坐つて、御隠居様／＼と烟草まで吸ひつけて出された其人かとつく／＼。お春さんの顔を見るけれども、今ではやつぱり自分達と同じく絞りの浴衣を着て、せまいメレンスかなにかの帯を締めて居るのを見ると、どうしても世の中にせまいおなかおばあさんには、自分が知つて居るそこの家庭以外に想像が及ばないから、どうも眞實とは思へぬ。たゞ煙に巻かれたやうに、「さうけえ／＼、大へんなこつたねえ」を繰り返して居る。解り切らないから感服もしない。

十八の時に或る町の士族に嫁に行つて、子供まで出来ただけれども、姑がやかましいからと言つて逃げて歸つた。その子供のことである。後の嫁にはなんでも三人ばかり女が生れたさうで、母子の仲がうまく行かず、息子は出生して東京で生活をして居る。それがあゝ冬何處でどう聞いたか、突然山のおばあさんを尋ねて来て、二人は母子の對面をした。其次の年の春、是非にといふので上京して、一月ばかり其家で暮した其時のことである。尤もそれから其息子からは、金の自由の利くせいか、時を送り物などをして、母といふのも名ばかりな母に盡して居る。とにかく珍らしく優しい人である。



だからこそ猶更おなかばあさんは話が大袈裟なんだと思つて居る。そんなにして居てどうして生活がたつていけるものかと、直ぐに持ち前の固い心に戻つて来る。ふとおなかおばあさんは、嘆息してこんなことを言ひ出した。

「ほんに世の中も贅澤になつて来たもんだ、助の嫁をとる時あ、みんな私が直し物で間に合したのにやれ新らしいものでなくちや可笑しいの、縮緬でなくちや恥かしいのつて途方もない、ほんに今の若い者の贅澤ばかり語つて、駄目でござい、私はあ、その家の紋さへついてればなんでもいいんだからうていふんですげつともない」

この頃嫁が、自分に隠して絹なぞを買ひ集めて居るのを思ひ出したのだ。

「ほんに今年あたりは久さんにも嫁とつてやんなくつてはなりやせんない、いくらか立派なお仕度が出來やすばい」

お春はあさんはわざとこんな言を言つて見る。兎に角町に聞えたあれだけの財産になつて、猶孫嫁の結納を古物で間に合せたい位の考で居るおなかおばあさんの心を可笑しく思つた。何家の嫁様の帯は幾何したとか誰その染め直しものがよく出来たとか、暫く着物の話に移つた。お春おばあさんはやがで簞笥からセルの單物を出して來て見せた。それは去年から心掛けて、今年出来たものである。おなかおばあさんには、こんな光りのない品が、どこがそんなに價值があるんだらうと不思議に思はれた。そしていつまでも着物なぞを拵へて喜んで居るお春さんの心を、羨しいやうな氣も起りあはれなやうな感じもした。今更に氣の若い人だと思つた。一時たてられた噂なども思ひ出した。

出戻りのお春さんは間もなくまた町の荒物屋へ嫁いた。さうして男一人に女を三人生んだ。それらの

感じもした、今更に氣ひ着いたと思ふ。一瞬、思ふに、
出戻りのお春さんは間もなくまた町の荒物屋へ嫁いた。さうして男一人に女を三人生んだ。それらの

を集めたなら、今では孫が十人近くあるが、子供なぞはあまり好きな方ではなかつた。亭主が死んでから、
店を伴夫婦に委して、自分は二階で三味線の師匠などをして居た。その頃から山の家に隠居をして居た
近江屋の石民(俳名)の妾をして居るなど、言はれて、或る人はまた、陸の辰さんはあはれは眞實は荒物屋
の子ぢやないんだなども言ひ觸らした。近江屋の石民が死んでからは、留守居となつて山の家に住み
きりである。

「お春さん、貴女は今年幾歳なんだつけねえ」

おなかばあさんは突然こんなことを聞き出した。

「え、私ですか、私は貴女より四ッ下なんですさ」

「さうすると、五十……」

「六」と高く引きとりて、

「お互に毫れさね」

脚へて居た楊子を投げ捨て、起つて、お春さんは提灯箱棚の脇から三味線をはづして來た。褪めた襷

金の袋をとつて、ぼつんぐと弛んだ絃をしめて居る。

庭には青桐の葉の影が一ぱいになつた。俄に酔ひを覚えて、

「ご免なんしょ」と手枕にごろり横になつた。おなかおばあさんはまた染めた毛を艶々と小さな髷に結

つて、湯上りの顔に、赤味ばしつた眼のあたりをつくく眺めて、お春さんの唇は赤いと思つた。